

ときの玉手箱

彦根城博物館からのメッセージ



第341回

井伊直興と南嶺慧詢の贈り物

当館には、井伊家四代直興（二五六〜一七一七）が禅僧の南嶺慧詢（一六二九〜一七二四）に宛てた直筆の書状九十三通を収めた卷子が伝来しています。南嶺は、臨済宗永源寺派の本山永源寺の住持を勤めた高僧で、貞享二年（一六八六）に同寺の末寺松雲寺に移り、篤く仏教を信仰する直興の帰依を受けました。これらの書状は、元禄期（一六八八〜一七〇四）から宝永期（一七〇四〜一七一七）に作成されたものが中心で、法要の依頼やお礼、仏道修行に関する質問などが記されており、直興の仏教信仰の一端を具体的に知ることができる貴重な資料です。

また、二人は書状に添えて様々な品を贈りあっています。例えば、宝永三年（一七〇六）六月十九日に直興が南嶺に宛てた書状（写真）の追書（追伸のこと、写真冒頭2行と4行目）を見てみましょう。ここには、「追而黄色成八庭手作之瓜二候、風味中々美濃瓜二八及び申さず候得共、御慰之ため相ぞへ申候（黄色

のものは庭で手作りした瓜です。風味はなかなか美濃瓜には及びませんが、御慰みのために添えます）」とあり、庭で育てた瓜が書状と一緒に贈られたことがわかります。この他にも直興から南嶺へは、菓子や昆布といった贈答品と思われるものをはじめ、龍眼肉という滋養強壮の効果がある薬種、かき餅、野菜や果物が送られました。

また、元禄十年頃に直興が南嶺に宛てたと推定される書状を見ると、庭先で作った苺一籠と「松な（松菜のことか）」を直興が贈ったことがわかります。特に「松な」については、江戸の老中の屋敷に植えられていたものの種を直興が入手し、それを彦根で作らせたと綴っています。さらに、「さつと湯にいたし、ひたし物、さしみなど二而、賞味申候へば、かろく風味面白キもの二而候（「松な」は、さつと湯引きし、お浸しや刺身などで賞味すれば、あっさりとして風味が面白い物です）」と、おすすめのお供え方まで伝えています。

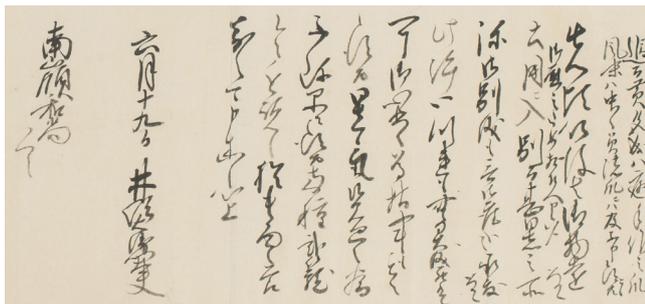
一方、南嶺から直興へは、松雲寺境内で獲れた栗や、手製の「桂味噌」が贈られています。「桂味噌」がどのような品なのかはわかりませんが、酷暑の折に食欲不振となった直興が南嶺へ所望した物であることから、直興の食欲を刺激する好みの逸品であったと考えられます。

ここで注目されるのは、直興が贈った野菜や果物の大半が「庭」で作られたものであった点です。書状からは、先に紹介したものの他に、茄子、浅瓜（白瓜）、梨、林檎が栽培されていたことが確認できます。この「庭」が彦根のどこにあったのかは特定できませんが、直興がこれらの品々を自宅近くで作らせ、楽しんでいた様子がかがえるのです。

また、二人が、畏まった品よりも、身近な品を贈り合っていた点も注目されます。宝永二年に二人は師僧と弟子の関係になりますが、その前後で書状の内容や贈り物に変化は見られません。ここからは、二人が、仏道修行における師弟関係を基本に据

えつつ、身分を越えて互いを思い合う関係を築いていた様子が伝わってきます。

【彦根城博物館学芸員 北野智也】



南嶺慧詢宛 井伊直興書状（部分、当館蔵）

写真の作品は、企画展「井伊直興と永源寺南嶺慧詢」で9月29日（日）まで展示します（期間中無休）。